**拙者　親方と申すは**   
　せっしゃ　おやかたともうすは　  
  
「親方」：薬売りは「香具師（やし）」と呼ばれる路上商人組合に入っており、その中に「親方（親分）」と「子分」がいました。  
ここでは、このお芝居の主人公の「外郎売り」さんが、自分の「親方」について説明することによって、まっとうな（インチキではない）「薬売り」であることを強調している台詞ということです。  
  
＝私（はこのように薬売りですが、制度上「親方」がおります。（その、私の）親方と申しますのは（どういう人かと申しますと）、  
  
以下、↓「親方」の説明です。  
  
**お立合のうちに 御存じのお方も　ござりましゃうが**   
　おたちあいのうちに ごぞんじのおかたも　ござりましょうが   
  
知ってるひといなくてもこう言いますよね、今も。  
電話セールスとかで「テレビCMでもおなじみの」と言うようなかんじだと思います。…知らねえよ（笑）。  
  
＝ここにお立ち合わせになっているみなさんの中にも（私の親方は有名ですから）ご存知のおかたもいらっしゃるでしょうが、  
  
**お江戸を発って　二十里上方　相州小田原　一色町を　お過ぎなされて**  
　おえどをたって　にじゅうりかみがた　そうしゅうおだはら　いっしきまちを　おすぎなされて  
  
＝お江戸を出発して上方に向かって二十里（約80㎞、すっごくがんばれば一日でいける、ふつうは2日くらいの旅程）、相模の国は小田原の、一色町の少し先にいらして  
  
**青物町を　登りへおいでなさるれば**   
あおものちょうを　のぼりへおいでなさるれば　  
  
＝「青物町」というところをさらに上方に向かってお行きになると、  
  
一応地図張っときます、現小田原市です。クリックで拡大。

右に「青物町」の文字があります。通り（東海道）を西に進むと「ういろう」の文字が。画面には入ってませんがこの東の方に「唐人町」というのがありました。  
  
**欄干橋　虎屋藤右衛門**  
　らんかんばし　とらやとうえもん　  
  
今もいらっしゃいます、籐右衛門さん。今もある「外郎屋」さんの代々の当主です。今は「外郎 籐右衛門」さんのようです。  
江戸末期に書かれた本に、「欄干橋虎屋某（らんかんばし とらや なにがし）」が「ういろう」の元締めとして存在し、香具師のなかでもとりわけて規模が大きい、という記述がありますので、江戸時代には代々「虎屋 籐右衛門」と名乗っていたようです。  
  
＝（その青物町を上にいったところにある店の）欄干橋　虎屋藤右衛門（というのがわたくしの親方ですが）、  
  
**只今は　剃髪致して　円斎　と　名乗りまする**  
　ただいまは　ていはついたして えんさい　と　なのりまする   
  
「剃髪」は、つまり出家です。  
が、いわゆる「お寺に入ってお坊さんになる」のとは少し違います。  
平安末期にはじまり、鎌倉時代に盛んになった「在家出家（どこかの教団みたいだけど）」というシステムです。頭を剃り、法名を付けますが、お寺には入らず、そのまま市井で生活します。出家というより「隠居」に近いです。  
チナミに古典などに出てくる「法師」というのは全部これです。「兼好法師」や「西行法師」なんかも、この「在家出家者」です。お坊さん（寺僧）ではないのです。  
で、頭剃って法衣を着て、大道芸をやったり太鼓持ちのようなことをやったりした人たちもいて、これらは出家すらしてませんが「法師」と呼ばれました。非常に区別が不明確です、適当です。  
この「円斎」さんは当時の「ういろう屋」さんのご隠居がモデルでしょうか？  
  
＝その親方は、いまは髪を剃って僧形になり、名前も変えて円斎と名乗っております。  
  
ここまでが「拙者の親方」の説明です。挿入文が多くて長いです。  
以下、商品説明に入ります。  
まず由来を述べます。ここも長いです（笑）。  
  
**元朝より　大晦日まで　お手に入れまする　此の薬は**   
　がんちょうより　おおつごもりまで　おてにいれまする　このくすりは   
  
「お手にいれ」の、この「入れ」は使役にとります。  
あと「元朝」を「元の国」という意味に取る説もあるのですが、ここではナシとします。すぐ後に「珍の国」と出るので、具体的に「元」という国名を挙げたとは考えにくいのです。  
  
＝元旦の朝から大晦日まで、みなさまのお手に入るようにいたしますこの薬は、  
  
**昔　珍の国の唐人　外郎といふ人　わが朝へ来たり**   
　むかし　ちんのくにのとうじん　ういろうというひと　わがちょうへきたり   
  
「珍の国」：よく分からない外国の名前はだいたい「珍」です、深い意味ナシです。  
「唐人」：「唐の国の人」でも「中国人」でもありません、「外国人」はすべて「たうじん」です。  
「外郎（ういろう）という人」：「外郎」はもともと名前じゃなく、中国での役職名です。元の国の「陳宗敬（ちん そうけい）」というひとが元の滅亡とともに日本に亡命して帰化しました。中国での役職名で呼ばれて「外郎」さんと名乗ったようです。  
  
＝昔、珍の国からきた外国人である外郎という名の人が我が国へ来たのでした。  
  
**帝へ参内の折から　この薬を　深くこめ置き**   
みかどへさんだいのおりから　このくすりを　ふかくこめおき   
  
実は日本に帰化した「外郎」さんは都を嫌い、ずっと博多に住んでました。息子の宗奇さんが足利幕府の求めに応じて上京します。  
宗奇さんが作ったお菓子である「ういろう」は、当時のお菓子のレベルの中では最先端でした。  
このお菓子は外国使節の接待にも使われてたそうなので、宗奇さんと宮廷とのつながりは深かったかと思います。かなり身分の高い人に会っていても不思議ではありません。  
「透頂香（とうちんこう）」という名を帝が付けた、というのも（事実関係は知りませんが）表向きは定説のようです。ただ、ホントに「帝に参内」した（直接会った）かはビミョウかもしれません。南北朝のころだから、帝の権威も落ちていたので、会えたかもしれないですね（笑）。  
  
このへんの詳しいことは、[＝こちら＝](http://somikakuda.jugem.jp/?eid=94#sequel)に書いてみました。  
  
＝帝に参内したときから、この薬を深くしまい込んだままにして外には出さず、  
  
**用ゆる時は　一粒ずつ　冠のすき間より　取り出す**   
　もちゆるときは　ひとつぶずつ　かんむりのすきまより　とりいだす   
  
冠というのは王冠ではなく、烏帽子や中国のかたならチャイナな帽子などです。当時は頭に何かかぶっているのが常識でした。  
  
＝薬を自分の帽子の中に入れて置いて　使うときは一粒ずつ頭との隙間から大切に取り出すのだ。  
  
**依って　その名を　帝より　透頂香　と　賜る**  
よって　そのなを　みかどより　とうちんこう　と　たまわる  
  
＝その様子から、帝からその薬の名を「透頂香」と付けていただく。  
  
でも多分、冠の隙間から取り出したから「透頂香」じゃなくて、薄荷などの成分がスーっと頭の上まで突き抜けて香るイメージから「透頂香」と付けたんだと思います。帽子の中に入れておいたらムレそうです…。  
  
**即ち　文字には　頂き　透く　香い　と　書いて**  
　すなわち　もんじには　いただき　すく　におい　と　かいて   
  
＝つまり、文字であらわすと、「頂き」「透く」「におい（香り）」と書いて  
  
**とうちんかう　と　申す**  
　とうちんこう　と　もうす   
  
＝（その名を）「とうちんこう」という。  
  
**只今は　この薬　殊の外　世上に弘まり　方々に似看板を出し**　  
　ただいまは　このくすり　ことのほか　せじょうにひろまり　ほうぼうににせかんばんをいだし   
  
＝（ここまでの説明は昔のことで、このように由緒正しい薬なのだが）現在はこの薬の存在は、たいへんに世間で有名になり、あちこちに（本物でないこの薬が）にせ看板を出し、  
  
**イヤ　小田原の　灰俵の　さん俵の　炭俵　のと**   
　いや　おだわらの　はいだわらの　さんだわらの　すみだわらのと  
  
「灰俵」以下「おだわら」にひっかけたただのシャレです。「灰俵」と「炭俵」は当該商品が入った俵です。  
「さん俵」は俵の上に付いてる、丸く編んでフタになってる、あれです。  
  
＝いやもう、（ういろう本舗のある）小田原（産）だの　灰俵だの　さん俵だの　炭俵　だのと  
  
**色々に　申せども**  
　いろいろに　もうせども  
  
＝いろいろに（そのにせ商品の名前や由来を）言うのだが、  
  
実際ニセモノあったようです。  
  
**平仮名をもって　ういらう　と記せしは　親方円斎ばかり**  
  
　ひらがなをもって　ういろう　としるせしは　おやかたえんさいばかり   
  
＝ひらがなを使って「ういろう」と商品名を書いているのは  
（わたくしの）親方、円斎（虎屋籐右衛門）だけである。  
  
**もしや　お立合の中に　熱海か塔ノ沢へ　湯治においでなさるか　又は　伊勢参宮の折からは**   
　もしや　おたちあいのうちに　あたみかとうのさわへ　とうじにおいでなさるか または　いせさんぐうのおりからは　  
  
イキナリ話題転換です。  
小田原「ういろう本舗」店自慢がはじまります。  
  
＝もしも、ここに居あわせておいでのかたの中に、熱海か塔ノ沢（箱根）へ湯治にお行きになるか、または伊勢まいりにおいでになる機会がございましたら、  
  
熱海や箱根での湯治（というか観光したあと温泉宿で遊ぶ）と、「伊勢参宮」（というか観光したあと旅館で精進落としに遊ぶ）。江戸市民が東海道を西に向かう目的のほとんどがこのふたつでした。上方見物は遠いしね。ハワイよりグアムみたいなかんじでしょうか。  
  
**必ず　門違い　なされまするな**   
　かならず　かどちがい　なされまするな   
  
＝そのときは、絶対に入る店をお間違えになってはなりませんよ。  
  
**お登りならば　右のかた　お下りなれば　左側**　  
　おのぼりならば　みぎのかた　おくだりなれば　ひだりがわ   
  
＝（上方に）お上りになるとしたら、道の右のほうに、江戸にお下りになるのでしたら、道の左側（にその店はございます）。  
  
**八方が八つ棟　表が三つ棟　玉堂造り**   
　はっぽうがやつむね　おもてがみつむね　ぎょくどうづくり   
  
店の外観の説明です。  
  
＝八方に八つの棟があり（屋根の三角が、正面に三つ、裏面に三つ、左右の側面にひとつずつ、計八個あるのです）、正面側は三つ棟が見えて、それはりっぱな御殿風の造りで、  
  
写真です。  
  
ついでにこの景観についてワタクシが抱いていた著しい誤解についてもご覧ください。  
  
…真実を知ったときはけっこう傷つきました…。  
ていうか実物四角形じゃん、「八方」じゃねえじゃん、むきー!!   
  
**破風には　菊に桐の薹の　御紋を　御赦免あって**  
　はふには　きくにきりのとうの　ごもんを　ごしゃめんあって  
  
菊の御紋は朝廷御用達のしるし、桐の薹（花芯）の紋も朝廷の替え紋です。  
  
＝屋根の合わせ目のところの飾りには菊の御紋と桐の薹の御紋を使うことについて（帝から）御赦免があって、  
  
**系図正しき薬でござる**  
けいずただしき　くすりでござる  
  
＝つまりそれくらい「ういろう」という薬はその品質のよさによって朝廷と昔から関係が深い、代々の家系の伝承がしっかりした店の、信用できる薬なのであります。  
  
**イヤ　最前より　家名の自慢ばかり　申しても**　  
　いや　さいぜんより　かめいのじまんばかり　もうしても  
  
＝いや、さっきから、「ういろう」の店がいかに名家であるかの自慢ばかり申し上げても、  
  
**御存じない方には　正真の胡椒の丸呑　白川夜船**   
ごぞんじないかたには　しょうしんの　こしょうのまるのみ　しらかわよふね   
  
＝「ういろう」をご存じないかたには、なんのありがたみもなく、まさしくそれは胡椒を丸飲みすると辛さがわからないようなもの、または「白川夜舟」の例えのごとく、眠ったまま名所を通り過ぎて気付かないようなものです。  
ていうか「白川夜舟」の場合そもそも京に行ってませんが。  
  
**さらば　一粒食べかけて　その気味合を　お目にかけましゃう**   
　さらば　いちりゅうたべかけて　そのきみあいを　おめにかけましょう   
  
＝であるなら、薬を一粒ちょっと食べて（飲んで）みせて、その効き方の様子をみなさまにお目にかけましょう。  
  
**まず　この薬を　かやうに一粒　舌の上に　乗せまして**　  
　まず　このくすりを　かようにひとつぶ　したのうえに　のせまして  
  
＝まず、この薬を、このようにひと粒舌の上にのせまして、  
  
読み方のハナシですが、上では「いちりゅう」といい、ここでは「ひとつぶ」と言います、上の文章は口上色が強く、漢文調なのです、だから漢文風に音読み、ここは実演ですからちょっと口語調で訓読みなのだと思います。  
  
**腹内へ　納めますると**   
　ふくないへ　おさめますると  
  
＝薬を飲み込んでお腹の中に納めてしまいますと、  
  
てことは「ういろう」舐めるクスリじゃなく内服薬です。  
なんか「痰切り、口臭予防」効果が謳われるので「のど飴」っぽい印象ですが、ちょっと違います。  
もっとも「ういろう摘む（つむ、＝かじる）」という表現が西鶴の本にあるので、口の中で溶かすのもアリだったようです。  
  
**イヤ　だうも云へぬは　胃　心　肺　肝が　すこやかになって**　  
　いや　どうもいえぬは　い　しん　はい　かんが　すこやかになって   
  
＝いや、どうにも口では説明できないほどすばらしいことには、胃、心臓、肺、肝臓の調子がよくなって、  
  
漢方医学をなめてはいけません、解剖学的な位置や形状の把握は不正確でも、その機能や相互が連関して体全体に与える影響については、現代においても漢方医学のほうが、西洋医学よりはるかに正確、かつ豊富な情報を持っております。  
「痰切り薬」のくせに効能おおげさ、と思われるかもですが、成分を調べたら人参や桂皮が入っていましたので相応の効果が見込めます。滋養にもいいです。  
  
成分は[＝こちら＝](http://somikakuda.jugem.jp/?eid=93#sequel)に載せました。  
  
**薫風　咽より来たり　口中　微涼を生ずるが如し**   
　くんぷう　のんどよりきたり　こうちゅう　びりょうをしょうずるがごとし   
  
＝さわやかな香りの風がのどの奥より出てくるのである、そして口の中は涼しい風が起ったようなかんじになる。  
  
薄荷入ってますもんね（笑）、あと成分の「阿仙」というのにフラボノイドが入ってます。  
  
**魚鳥　茸　麺類の食合せ　其の外**   
　ぎょちょう　茸　めんるいのくいあわせ　そのほか   
  
＝魚や鳥、茸類、麺類の食い合わせでおこる体調不良体調不良、そのほか、  
  
成分に解毒作用、消化促進作用、健胃作用などがありますよ。  
チナミに、「ういろう」は今も一応「医薬品」扱いらしく、「外郎」の店に行って症状を話して対面販売でしかゲットできません。お土産気分では買えないようです。  
  
**万病　速効ある事　神の如し**  
　まんびょう　そっこうあること　かみのごとし   
  
＝よろずの病にすばやい効き目があることは、まるで人知を越えた不思議な存在のようである。  
  
「神」をそのまま「神」と訳して西洋文明的な全知全能の創造神をホウフツとされても困るので（笑）、てきとうに意訳します。  
万病に効く、は言い過ぎな気もしますが実際いろいろな効能の生薬がバランスよく入っているようなので、どんな症状でもあるていどは一時的であっても軽くなったかもしれません。  
「治療」はできませんが「対症療法薬」としてはたしかに万能感があります（治りませんが）。  
  
以下で、早口言葉が始まります。つづく。

**さて　この薬　第一の　奇妙には**　　  
　さて　このくすり　だいいちの　きみょうには   
  
「奇妙」というのは「ヘン」という意味ではなく、「ふしぎですばらしい」という意味です、ほめ言葉です。  
  
＝さて、この薬ですが、まずいちばんはじめのすばらしい効き目としては  
  
**舌のまはることが　銭独楽が　はだしで逃げる**   
　したのまわることが　ぜにごまが　はだしでにげる   
  
＝舌が回るということが、（同じ回るものである）銭独楽が、とてもかなわないと裸足で逃げ出すほどよく回るのである。  
  
銭独楽・ゼニゴマ、  
ゼニ、つまり一文銭を数枚重ね、穴に棒を通して作った独楽です。当時の一文銭は穴が四角でしたから棒を固定しやすく、ちゃんと中心部に穴がありますから安定して長時間回ります。  
宴席などでその場で作って回し、回り終わるまでに浄瑠璃一段語る、等の遊びをしたそうです。つまり「銭独楽と競争して早口で語る」という遊びが実際にあったのです。  
江戸後期には「ゼニゴマ」は「銭独楽型にデザインした土独楽」のことになったようですが、「外郎売」ができたのは江戸前半期ですから、ここでいっているのは本物の「銭で作ったゴマ」だと思います。  
  
**ひょっと舌が　まはり出すと　矢も楯も　たまらぬじゃ**   
　ひょっとしたが　まわりだすと　やもたても　たまらぬじゃ   
  
＝ひょいと（軽い感じで）舌が回り始めると、矢や盾で武装していてもたまったものではない（止めることはできない）のだ。  
  
**そりゃそりゃ　そらそりゃ　まはってきたわ　まはってくるわ**  
　そりゃそりゃ　そらそりゃ　まわってきたはまわってくるは　  
  
＝そりゃそりゃ　そらそりゃ　舌が回ってきたぞ　舌が回って来るぞ  
  
**アワヤ咽**  
　あわやのど   
  
＝「あ」行「わ」行「や」行の音は（中国音韻学の）「喉音（こうおん）」から始まる  
  
**サタラナ　舌に　カ牙サ　歯音**  
　さたらな　したに　かげさ　しおん  
  
＝「さ」「た」「ら」「な」の行の音は「舌音（ぜつおん）」、「か」行は「牙音（がおん）」、「さ」行は「歯音（しおん）」である  
  
意味に即してセリフを言うと「カゲ　サシオン」だと思いますが、聞き取りにくいためか、今の位置で切るのが普通のようです。  
  
**ハマの二つは　唇の軽重**   
　はまのふたつは　くちびるのけいちょう  
  
＝「は（ファ）」「ま」の二音は「唇音（唇音）」で始まる。（唇の閉じかたが軽ければ「は（ファ）」に、しっかり閉じれば「ま」の音になる）  
  
この部分と、中国の**「音韻学」**との関連について[うにうにさま](http://www2.odn.ne.jp/~cbp91480/)からご指摘いただき、それに基づいて訳しなおしました。  
詳しいことは別載します。たいへんおもしろいのでぜひご覧ください。  
[＝こちら＝](http://somikakuda.jugem.jp/?eid=98" \l "sequel" \t "_blanc)です。  
  
**開口さわやかに　あかさたなはまやらわ　おこそとのほもよろを**   
　かいごうさわやかに　あかさたなはまやらわ　おこそとのほもよろを   
  
＝（という発音のをふまえて）口の開け閉めもきびきびと　あかさたなはまやらわ　おこそとのほもよろを  
  
当時（江戸前半期）の役者さんが、このように正確な発声訓練を受けていたことがわかります。  
また、江戸時代は50音を「いろは」でしか認識していなかったような気がしがちですが、実際には現代とまったく同じ発音表が完成していたこともわかります。かなり進んでます。  
  
**一つへぎへぎに　へぎほしはじかみ**   
　ひとつへぎへぎに　へぎほし　はじかみ  
  
これもテキストによっては「ひとつへぎへぎ　二へぎほし…」と書いてあるのですが、  
「ひとつ」の対に「二」は来なかろうと。「ふたつ」だろうと。  
まあカタカナの「ニ」と漢数字の「二」なんて区別つきゃしませんから、正解がどっちかなんて原文見ても分かりませんが。  
では「へぎへぎ」は何か、というと「へぎ」だと自分は思います。薄くそいだ板で作った四角いお皿です、  
…あー、「三方」の上の部分、あれ。  
「へぎ干し」薄く削ったお餅を干したもの、今の欠き餅です。  
  
＝ひとつの「へぎ」に「へぎ干し」と「はじかみ生姜」と  
  
**盆豆　盆米　盆ごぼう**   
ぼんまめ　ぼんごめ　ぼんごぼう   
  
これも多分上の「へぎ」に一緒に乗ってるかと。「盆豆」と「盆米」は「お盆のお供えの豆や米」だと思います。お盆にゴボウを供えたかは、地域差があると思います。「お盆」のやりかた自体が今とはずいぶん違います。ここは語呂だけの可能性が強いかと思います。  
  
＝さらにお盆のお供えの米や豆やゴボウ（を乗せる）。  
  
**摘蓼　摘豆　摘山椒**   
　つみたで　つみまめ　つみさんしょう   
  
＝摘んだばかりの、または摘んだまま調理していないタデ、豆、山椒、  
  
これも「へぎ」に乗ってるのかなあ。  
  
**書写山の　写僧正**   
　しょしゃざんの　しゃそうじょう   
  
とりあえず**書写山円教寺（しょしゃざん えんきょうじ）**のサイトへのリンクです（笑）。  
<http://www.shosha.or.jp/index.htm>  
姫路にある古刹です。チナミに「義経記（ぎけいぎ）」によれば、若い頃の弁慶が暴れて焼いたお寺です。  
この文句は「サンショウ」の音から繋がってるだけでしょうから、訳はそのままです。  
これもテキストによっては「社僧正」になってます。が、「社僧」は神社にいるお坊さんのことです。本地垂迹、神仏習合のなせるワザです。「書写山」はお寺ですからそもそも「社僧」はいないと思います。  
そして「僧正」は僧正さまです。「社僧」と「僧正」がくっつけば「社僧正」になりますが、そんな単語ないと思います。  
書写山は天台宗、密教な世界です。江戸時代お経をひたすら写す係のお坊さんは実際いましたので、そっちだと思います。  
  
＝書写山の、写僧正  
  
以下単語だけの部分は解説だけで訳はなしです。  
  
**粉米の生噛み　粉米の生噛み　こん粉米のこ生噛み**   
　こごめのなまがみ　こごめのなまがみ　こんこごめの　こなまがみ   
  
昔は脱穀作業をするのにお米をつきました。作業過程で砕けてしまったお米が「粉米、または小米」です。  
「小米で一升（多分安い）」みたいな商いがあったようなので、小米だけを炊いてごはんにしたり、ぜったいおいしくなかったり、しかも噛みごたえがないので「生噛み」になっちゃう、そんな意味かと。  
江戸中期すぎると精米技術が進んで、「小米」はあまり出なくなったかもしれません。  
「極附播随長兵衛（きわめつき ばんずいちょうべえ）」というお芝居のセリフに「鬼の金歯の一粒選り（ひとつぶえり）米で育ったこの体」というのがありますが、  
「鬼の歯」というのが精米機です。この「鬼の歯」で精米したお米から、砕けたものや小さいのをのけて、いいのを一粒ずつ選んだお米で丈夫に育ったこの体、みたいな意味です。砕けて食べにくいお米は、なにげにイヤなものだったのでしょう。  
  
**繻子　緋繻子　繻子　繻珍**   
　しゅす　ひじゅす　しゅす　しゅちん   
  
「しゅす」は絹織物、つやつやしてキレイなあれ、「ひじゅす」は紅染めの「しゅす」。着物の裏とかに使うときは「紅葉（もみ）」と呼ばれました。「しゅちん」は色とりどりに模様を織り出した「しゅす」。  
  
**親も嘉兵衛　子も嘉兵衛　親嘉兵衛子嘉兵衛　子嘉兵衛親嘉兵衛**   
　おやもかへい　こもかへい　おやかへいこかへい　こかへいおやかへい   
  
ふつう子が「嘉兵衛」を名乗った時点で親は隠居するかして改名すると思います。区別付かなくてメイワクです（笑）。  
  
**ふる栗の木の　古切口**   
　ふるくりのきの　ふるきりくち   
  
＝古い栗の木を切った跡の古い切り口  
  
**雨合羽か　番合羽か**  
　あまがっぱか　ばんがっぱか   
  
今「江戸時代の合羽」というと、三度笠」かぶった博徒が着てる、マントみたいのをさしますが、江戸時代に「合羽」というと、今の「和装コート」が一番形状も機能も近いです。  
「番○○」というのは、「番茶」や「番傘」もそうですが、大量に常備して、番号を付けて管理するような安い量産品、みたいな意味です。  
「番合羽」もそういう安い合羽です。  
  
**貴様の脚絆も　皮脚絆　我らが脚絆も　皮脚絆**   
　きさまのきゃはんも　かわぎゃはん　われらがきゃはんも　かわぎゃはん  
  
脚絆、布製が主でしたが、革のもありました。ていうか江戸時代、「皮羽織」とか、けっこう皮製品衣料多いです。  
  
**しっかは袴の　しっぽころびを　三針針中に　ちょっと縫うて**  
　しっかわばかまの　しっぽころびを　みはりはりなかに　ちょとぬうて  
  
「しっ」は接頭語です。イキオイだけです。  
「針中」と書いてあるテキストが多いのですが、もとは「針なか」と書かれており、たぶん「針なが」であろうという指摘をいただきました。そうだ!!   
  
＝革袴のほころびを、幅の広い縫い目で（間に合わせなかんじに）3針ちょっと縫って、  
  
**縫うて　ちょっと　ぶんだせ**  
　ぬうて　ちょと　ぶんだせ  
  
＝縫って（その袴をはいて）ちょっとオモテに飛び出せ  
  
**河原撫子　野石竹**   
　かわらなでしこ　のぜきちく   
  
上の文との連関はないです。「かわ」という音だけだと思います。「河原」も「野」も修飾語のようです。「かわらなでしこ」という種類があったわけじゃなく。「やまほととぎす」と同じような言い方？  
  
＝なでしこ、せきちく（訳ですかこれ）  
  
**のら如来　のら如来　三のら如来に　六のら如来**  
のらにょらい　のらにょらい　みのらにょらいに　むのらにょらい   
  
「野良猫」みたいに「野良如来」がいたら楽しいと思いましたが、やっぱりいません、ちぇ。音だけかと。だから訳はなし。  
  
**一寸先の　お小仏に　おけつまずきやるな**   
　ちょとさきの　おこぼとけに　おけつまづきやるな   
  
＝ちょっと（道の）先にある小さい仏様（道ばたに安置されてる仏像ですね）お蹴つまづきになるな。  
  
**細溝に　泥鰌　にょろり**   
　ほそどぶに　どじょ　にょ　ろ　り   
  
＝細いどぶにドジョウがにょろり（一応訳した）  
  
**京の　なま鱈　奈良　なままな鰹　ちょと四、五貫目**   
　きょうの　なまだら　なら　なままなかつを　ちょとしごかんめ   
  
マナガツオはカツオではなく、**イボダイ**の仲間のおさかなです。スズキ目（もく）です。おいしいらしいです。  
カツオは足が速い魚なので内陸部の京都や奈良では生食できなかったようです。  
なのでこの魚をカツオの代わりにナマス（刺身）にして食べたので、「こっちが本当のカツオ」というような意味で「マナ（真名）ガツオ」と呼ばれたという説と、  
関東のほうではカツオは高級魚でしたが、それに対抗して関西で「こっちのほうがカツオより美味しい」という意味で「マナガツオ」と呼んだという説とがあるようです。  
ここでは「生マナガツオ」と言っているので「生食可」を重視して「奈良でカツオの代わりに食べたから」説を取りたいと思います。  
参考リンク：<http://kensui.on.arena.ne.jp/syun/H16/managatuo.htm>  
  
＝京の生鱈（西京漬けにするのかな）　奈良の生のマナガツオ、（それらを）ちょっと４，５貫目（17.8キロくらい、そんなにどうすんだ生魚を）  
  
**お茶立ちょ　茶立ちょ　ちゃっと立ちょ　茶立ちよ**   
　おちゃだちょ　ちゃだちょ　ちゃっとたちょ　ちゃだちょ   
  
＝お茶をたてろ　茶をたてろ、ちゃっと（すばやく）たてろ　茶をたてろ  
  
**青竹　茶筅で　お茶ちゃっと　立ちや**   
　あおたけ　ちゃせんで　おちゃちゃと　たちゃ　   
  
＝青竹の茶筅でちゃっちゃっと（すばやく）たてろ。  
  
**来るわ　来るわ　何が来る　高野の山の　おこけら小僧**   
　くるわ　くるわ　なにがくる　こうやのやまの　おこけらこぞう   
  
＝来るぞ来るぞ、何が来る、高野山金剛峰寺（リンクなし）の木っ端小僧（と訳しておく）  
  
俗に「高野六十、那智八十」というそうで、これは高野山金剛峰寺（こうやさん こんごうぶじ）と那智山青岸渡寺（なちさん せいがんとじ）（熊野霊山にあるお寺）とは寺稚児が多く、男色が盛んで、それぞれ60歳、80歳もの寺稚児がいる、という冗談ですが、この「おこけら小僧」にもそのへんの隠語が含まれているかが、まだわかりません（わからなくてもいいです）。  
「こけら」というのは、大工さんの仕事のあとに出る木屑のことです。  
  
**狸百匹　箸百膳　天目百杯　棒八百本**   
　たぬきひゃっぴき　はしひゃくぜん　てんもくひゃっぱい　ぼうはっぴゃっぽん   
  
＝たぬき百匹…以下まんま。  
  
「天目」は茶器の天目茶碗のことではなく、ただ「お茶碗」のことでしょう。入ってるのがごはんか酒かは不明。  
  
**武具　馬具　武具　馬具　三武具馬具** **合わせて　武具　馬具　六武具馬具**  
　ぶぐ　ばぐ　ぶぐ　ばぐ　みぶぐばく 　あわせて　ぶぐばぐ　むぶぐばぐ   
  
言いにくいです。訳はそのまま  
  
**菊　栗　菊　栗　三菊栗　合わせて　菊　栗　六菊栗**   
　きく　くり　きく　くり　みきくくり　あわせて　きく　くり　むきくくり   
  
まんまです  
  
**麦　ごみ　麦　ごみ　三麦ごみ　合わせて　麦　ごみ　六麦ごみ**   
　むぎ　ごみ　むぎ　ごみ　みむぎごみ　あわせて　むぎ　ごみ　むむぎごみ   
  
自分はこれが一番言いにくいです。あと「お茶だちょ・・」も苦手です。  
  
**あの　長押しの　長薙刀は　誰が長薙刀ぞ**   
　あの　なげしの　ながなぎなたは　たが　ながなぎなたぞ   
  
＝あのなげし（説明いらないですよね？不安…）に乗っている長長刀は、誰の長長刀だろうか  
  
**向うの　胡麻殻は　えの胡麻殻か　真胡麻殻か**   
　むこうの　ごまがらは　えのごまがらか　まごまがらか   
  
＝むこうにあるゴマを絞ったかすは、荏胡麻のごまがらか、普通のゴマのごまがらか  
  
「荏胡麻（えごま）」はゴマ科ではなく、シソ科です。  
余談ですが「荏胡麻（えごま）油」、「シソの実油」はα-リノレン酸が豊富だそうです。一般の油(リノール酸）と違ってα-リノレン酸の油は炎症を抑える効果があります。普通の油はむしろ炎症をひどくします。  
というわけで、アトピーや花粉症のかたは、これらの油を使うといいようです。  
あと、「馬油」もα-リノレン酸の油です。  
  
**あれこそほんの　真胡麻殻**   
　あれこそほんの　まごまがら  
  
＝あれこそ本当の真ゴマのごまがらだ  
  
**がらぴいがらぴい　風車**  
　 がらぴいがらぴい　かざぐるま   
  
訳ナシ、「ごまがら」から音で「がらぴい」とつなげただけだとおもいます。

**おきゃがれ　こぼし　おきやがれ小法子**　  
　おきやがれ　こぼし　おきやがれ　こぼうし   
  
＝前半は「おきあがりこぼし」ですよね。  
後ろは、  
「起きやがれ」と取れば「起きろ小法師」です。  
「置きやがれ」と取れば、「(くだらない事を言って）ふざけるのはやめやがれ（江戸時代の言い回し）小法師」です。  
  
**ゆんべもこぼして　又こぼした**  
　ゆんべもこぼして　またこぼした  
  
＝夕べも寝小便をして、また寝小便をした　だと思います。  
  
だとすると上はやっぱり「起きろ」でしょうか。  
  
**たあぷぽぽ　たあぷぽぽ　ちりから　ちりから　つったつぽ**  
たあぽっぽ　たあぽっぽちりから　ちりから　つったっぽ   
  
一瞬意味わからなくてパニックになりますが、  
鼓（つづみ）の音の擬音です。前の「こぼした」の「た」から一応音がつながっています。  
  
**たっぽたっぽ　一丁だこ**  
　たっぽたっぽ　いっちょだこ  
  
「たっぽたっぽ」も鼓の音です。「いっちょうだこ」は「タコが一丁」と「一町（は言い過ぎだけど、大きい）凧」をかけてるかと思います。わかりにくい部分です。自信ないです。  
  
**落ちたら煮て食お　煮ても焼いても　食われぬものは**  
おちたらにてくお　にてもやいても　くわれぬものは   
  
＝（凧が）落ちたら（タコを）煮て食おう、（とはいえ）煮ても焼いても食うことができないものは  
  
**五徳　鉄きゅう　かな熊童子に**   
　ごとく　てっきゅう　かなぐまどうじに   
  
煮ても焼いても食えないものを並べていきます。  
・五徳、今もガスコンロに付いてる鍋を乗せる台です。昔はこれだけ売っていて火鉢に乗せて使いました。  
・鉄きゅう、鉄灸、鉄弓とか書くようです。お魚を焼く網です。  
・かな熊童子、  
大江山に「酒呑童子（しゅてんどうじ）」という鬼が棲んでいました。その家来で「四天王」と言われたのが**「金熊童子（かなぐまどうじ）」「石熊童子（いしくまどうじ）」「ほし熊童子（ほしくまどうじ）」「虎熊童子（とらくまどうじ）」**です。  
のなかのひとりです。食えません。  
手下がいる鬼ってヘンですが、ようするに、これは鬼じゃなくて盗賊だったのでしょう。鬼より怖いです。  
「五徳」「鉄きゅう」「かなぐま」と「金属つながり」です。  
  
**石熊　石持　虎熊　虎きす**   
　いしくま　いしもち　とらくま　とらきす   
  
「石つながり」に「虎つながり」で、食えなさそうなかんじで並べています。  
「石熊」と「虎熊」は、上に挙げた酒呑童子の手下たちです。「石持」はおさかなの「イシモチ」です。「虎きす」もおさかなの「キス」の一種です。当然食えます。  
「食えないもの」を挙げていきながら、名前はゴツいけど食べられるものをこそっと混ぜ込んだシャレです。  
  
**中にも　東寺の　羅生門には**   
　なかにも　とうじの　らしょうもんには  
  
＝その中にも、京の東寺にある羅生門には  
  
「中にも」というのは、上の「酒呑童子」の手下たちの中で、という意味です。  
ていうか、いや羅生門は平安京の都そのものの門で、東寺のそばにはあったけど東寺の門じゃないし（つっこみ）。  
  
**茨木童子が　うで栗五合　つかんでおむしゃる**  
いばらきどうじが　うでぐりごんごう　つかんでおんしゃる   
  
「茨木童子」は上の「酒呑童子」の一の子分です。鬼です。  
平安時代の有名な武士（もののふ）であった「渡辺綱（わたなべの つな）が、茨木童子の右腕を切り落しました。  
茨木童子は、この右腕を綱から取り返して、それを持ってその後も羅生門に巣くっていたのです。  
渡辺綱と茨木童子との話は、能や歌舞伎の「茨木」で有名ですよ。  
「（切り落された自分の）腕」と「茹で栗」とを引っかけています。  
「おむしゃる」は「お蒸しやる」だという説があるのですが、すでに茹でてあるものを蒸すかどうかが疑問です。  
  
＝茨城童子（という鬼）が、（切り落とされた自分の）腕と、ゆで栗を五合つかんで（棲んで）いらっしゃる  
  
ところで、「童子（どうじ）」はこの場合「子供」ではなく。鬼などの異形のモノを言います。なぜ「童子」が「鬼」を指すかといいますと、中世において男性の髪型は、頭の上で束ねて烏帽子か頭巾をかぶることに決まっていたからです。髪を束ねずにいるのは子供だけです。  
鬼は身なりにかまわないのでみんなザンバラ髪ですが、これは子供と同じ髪型です。なにで「童子」と呼びます。  
「童子」というのは、なので、人間社会の常識が通じない相手＝人外のもの、という意味があるのです。  
  
**かの　頼光の　膝元去らず**   
　かの　らいこうの　ひざもとさらず   
  
「頼光（らいこう）」は平安時代の武将「源頼光（みなもとの よりみつ）」です。家来の「四天王」を従えて、上述の大江山の酒呑童子を退治したので有名です。  
ここまでずっと「酒呑童子」ネタをひきずってます。  
  
＝かの（有名な源）頼光の膝元から離れることなく付き従って、  
  
で、誰が「膝元を去らない」のか、茨城童子がか、と謎だったのですが、以下の部分、彼の家来であり、「酒呑童子」を退治した伝説的勇者たちである**「頼光四天王（よりみつ してんのう）」**たちの名前とのシャレのようです。  
  
**鮒　きんかん　椎茸　定めて後段な**   
　ふな　きんかん　しいたけ　さだめて　ごだんな   
  
まず頼光の家来、俗に言う「頼光四天王」の名前書きます。当時は有名でした。  
**渡辺綱**（わたなべの　つな）、**坂田金時**（さかた　きんとき）、**占部季武**（うらべ　すえたけ）、**碓井貞光**（うすい　さだみつ）。  
  
＝鮒**（綱）**、きんかん**（金時）**、しいたけ**（季武）**、定めて**（貞光）**、（おそらく想像するに）食後のデザートの、  
  
「後段」というのは当時の宴席などで、食事の膳を全て出し終わった後に出るデザート的な軽食のことです。お菓子や果物ではなく、そばやそうめんなどが多かったようです。飲んだ後は麺類!!   
「後段な」は「剛胆な」に引っかけているかもしれません。  
  
**そば切り　さうめん　うどんか　愚鈍な　小新発知**   
　そばぎり　そうめん　うどんか　ぐどんな　こしんぼち   
  
「そば切り」はそば粉を練って、切ったそば、ようするに「そば」です。昔は煉ってたそば粉につゆをかけてそのまま食べる「そばがき」も多かったので、「そば切り」と言って区別しました。  
「新発知（しんぼち）」は正しくは新発意と書くようです。発心して仏門に入ったばかりのヒトです。  
  
＝（後段で出る）そば切り、そうめん、うどんか（音だけつなげて）愚鈍な、なりたて小坊主  
  
ここまで、ずっと「煮ても焼いても食えないもの（といいつつ食べ物）」の話と「酒呑童子」関連の話ををまぜこぜにしゃべっています。  
  
**小棚の　こ下の　小桶に　こ味噌が　こ有るぞ**  
　こだなの　こしたの　こおけに　こみそが　こあるぞ  
  
まあ、テンポよくするので「こ」を付けてるだけだと思います。訳はいいですよね。  
ここから↓  
  
**小杓子　こ持って　こすくって　こよこせ**  
　こじゃくし　こもって　こすくって　こよこせ   
  
＝味噌をすくってよこせと（笑）  
  
**おっと合点だ　心得たんぼの**   
　おっとがてんだ　こころえたんぼの  
  
＝おっとがってんだ、心得た、そのたんぼのある（かけことば、ていうかだじゃれ）  
  
**川崎　神奈川　程ヶ谷　戸塚は　走って行けば**  
　かわさき　かながわ　ほどがや　とつかは　はしっていけば   
  
↑ここまで、ひと息に言うんだそうです。長い。  
あと、「心得たんぼの　川崎…」ですが、  
「てんぽの皮」という言い回しとのシャレだと思います。「てんぽ」は「転蓬」と書き、根から離れて、そのへんをころころ転がる枯れ草です。そのように運任せ出任せのイキオイだけの態度を言います。「皮」は調子付けで意味はありません。  
「おっと合点だ心得た、出たとこ勝負でイキオイでやっつけよう、川崎・神奈川…」というかんじかと。  
  
＝川崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚の間は走っていけば  
  
**やいとを摺りむく　三里ばかりか**   
　やいとをすりむく　さんりばかりか   
  
「やいと」、ひざの下のちょっと外側のくぼみです。足の疲れをとって丈夫にするためにお灸をすえます。「三里」ともいいます。「奥の細道」で芭蕉もここに灸をすえています。  
意味は  
  
＝（川崎→戸塚までの間は走っていけばすぐなので、）「やいと」をすりむく「三里ばかりの距離」くらいに感じられる  
  
**藤沢　平塚　大磯がしや　小磯の宿を**  
　ふじさわ　ひらつか　おおいそがしや　こいそのやどを   
  
「大忙し」と「大磯」をかけております。「小磯」は幕府が定めた正式な宿場ではなかったのですが、「大磯」の補助的な役割を果たしていました。  
  
＝藤沢（宿）、平塚（宿）を通り過ぎ、大忙しで大磯や小磯の宿を  
  
**七つ起きして　早天早々　相州小田原　とうちんかう**   
　ななつおきして　そうてんそうそう　そうしゅうおだわら　とうちんこう   
  
「明け六ツ」が夜が明ける時間です。午前6時ごろです。「七ツ」はそのだいたい2時間前。朝4時ごろです。  
上の「川崎、神奈川…」のところから、小田原を出発して江戸にいたるまでの様子をテンポよく描いています。  
大急ぎで大磯の宿を、早朝午前4時に起きて出発して、小田原名産の透頂香を持って江戸に着いたのです。  
  
＝午前4時に起きて早朝に宿を発ってきた、相州小田原の透頂香です。  
  
もちろん「そうてんそうそう」「そうしゅう」と音を意識して並べています。  
これは「早口言葉風」というだけでなく、江戸という時代に書かれたものはたいがい、こういう風に「似た音を並べる」「ひとつの単語で複数の意味を持たせる」といった「言葉遊び」がはいっているのです。  
縁語、掛詞の伝統と「地口。しゃれ」という庶民の遊びが融合した結果だと思います。  
  
**隠れござらぬ　貴賤群衆の　花のお江戸の　花ういらう**   
　かくれござらぬ　きせんくんじゅの　はなのおえどの　はなういろう   
  
＝この世の中にこの商品が隠れている場所はありません（知らない人はいないすばらしい商品です）。身分の高いひとも低いひともたくさん集まっている、華やかな花のお江戸の盛りの花のように全盛の、花ういろう、  
  
「花」はただの飾りの接頭語です  
  
**あれ　あの花を　見て　お心を　おやわらぎや　という**   
　あれ　あのはなを　みて　おこころを　おやわらぎや　という   
  
『仮名手本忠臣蔵』七段目、「祇園一力茶屋の場」で、敵討ちをする気がないフリをして遊び呆ける大星由良之助（大石蔵之助ですね）の刀が赤く錆びているのを見て、  
様子を探りに来た敵方の家来たちがバカにしてシャレを言います。  
　「この刀、銘は「赤子丸」はいかがでござる」  
　「して、そのココロは」  
　「研ぎゃあい、研ぎゃあい」。（一部てきとうに略）  
…下らねえ。　  
まあとにかく、この時代、「ぎゃあ」が語尾に付けば「赤子の泣き声」にひっかけていいことになっていたようです。ということで↓に続きます。  
  
＝（花のお江戸の、その花ではありませんが）あれ、あそこにある花を見て、そのお心をなごやかになさいませなという、  
  
**産子　這子に　至るまで　この外郎の　御評判**   
　うぶご　はうこに　いたるまで　このういろうの　ごひょうばん   
  
＝（そのように「お（やわら）ぎゃあ」と泣く）新生児や乳幼児にいたるまでが、  
  
この外郎の世間でご評判いただいている様を  
ただ「評判を」でもいいんですが、「御」が気になるのでこんな感じにします  
  
**御存じないとは　申され　まいまいつぶり**  
　ごぞんじないとは　もうされ　まいまいつぶり  
  
＝ご存じないとは申されまい、まいまいつぶり（まあ音だけで繋げてるのでこんな訳で）  
  
**角出せ　棒出せ　ばうばう眉に**  
つのだせ　ぼうだせ　ぼうぼうまゆに   
  
＝（かたつむりなので）角出せ、棒出せ、ぼうぼう眉に、  
  
ぼうぼう眉って、「ぼう」の音以外に意味あるんでしょうか。二代目団十郎は、というか代々の団十郎は目がぎょろりと大きいので有名なので、ついでにぼうぼう眉だった可能性は高いかもしれません。  
  
**臼　杵　すりばち　ばちばち　ぐわらぐわらぐわらと**   
　うす　きね　すりばち　ばちばち　がらがらがらと   
  
「すりばち」から擬音の「ばちばち」につなげ、さらに「がらがらがら」と拡張していったのだと思います。  
臼も杵もすり鉢も、使うとうるさいです、ゴリゴリガンガンガリガリ、にぎやかな感じでしょうか。  
  
**羽目をはずして　今日おいでの　いずれも様に**   
　はめをはずして　こんにちおいでの　いずれもさまに   
  
「外郎売」の口上は路上パフォーマンス販売ですからにぎやかな場所でやります。お客さんたちもにぎやかな場所にハメをはずして遊びに来てるのです。  
  
＝（にぎやかな感じで）はめをはずして、今日ここにおいでのいずれもみなさまに、  
  
**上げねばならぬ　売らねばならぬと**  
　あげねばならぬ　うらねばならぬと  
  
＝（この薬を）さしあげなければならない、ていうかつまり売らなければならない、という気持ちで、  
  
**息せい引っぱり**  
いきせいひっぱり   
  
古語辞典というものは、出てるだろうと信じてた単語は出てなくて、「わきゃねえだろ」な単語をダメもとで引いてみると出てることが多いので、油断はできません、  
  
＝力をこめ、うんと気を張って、  
  
**東方世界の　薬の元じめ　薬師如来も　照覧あれと**   
　とうほうせかいの　くすりのもとじめ　やくしにょらいも　しょうらんあれと   
  
「東方世界」、つい、西洋文化圏に対するアジア仏教文化圏という意味だと思いたくなってしまいますが、違います。江戸時代だから。  
「西方世界」は極楽浄土を指しますが、「東方世界」は「東方浄瑠璃光世界（とうほう じょうるりせかい）」を指します。この世の東にあり、薬師如来が仕切っているらしいですが、西方浄土（さいほうじょうど）と違って人間は死んでも行けないようです。  
「薬の元締め」については、  
薬師如来さまは薬壺を手に持っています。病苦を救う仏様として信仰をあつめました。  
それを薬商人の総元締めで、いちばんえらい人、というい感じに冗談で言ってみたのだと思います。  
  
＝東方浄瑠璃光世界の主にして、衆生の病苦を救う薬師如来。薬の効力の源である薬師如来も（この「透頂香」のすばらしさを）はっきりとご覧あれと、  
  
**ホホ　敬って**   
　ほほぅ　うやまって   
  
「ほほう」と発音します。歌舞伎に頻出するかけ声みたいなもんです。重々しさを添えます。「ほほほ」と笑ってるのではありません、  
言い方は、後ろの「ほ」にアクセントを置き、はじめの「ほ」はできるだけ低いキーで、  
「ほ ほぉおおぅ」というかんじに重々しく言います。  
  
＝（薬師如来も、お立ち会いの皆様も）敬って、申し上げます。  
  
**外郎は　いらっしゃりませぬか**   
　ういろうは　いらっしゃりませぬか  
  
＝ういろうは、お入り用ではございませんか。